

教員の海外派遣に関する派遣期間中の教育研究活動実績報告書

Report of Educational/Research Activities of Sending Faculty

I. 派遣教員に関する情報 / Information of Sending Faculty

派遣教員氏名 / Name of Sending Faculty	中田瑞穂		
本学での所属機関 / Belongings at MGU	国際学部	所属機関での職位 / Position at MGU	教授
派遣先機関 / Hosting Institution	Hope College	派遣期間 / Sending Period	2019年8月から2020年2月

II. 派遣期間中の教育研究活動実績 / Educational or Research Activities of the Sending Period

※書ききれない場合は別紙に記入の上添付ください。Should you need more space, please attach the additional sheet of paper.

教育研究活動の概略 / Brief Statement of Educational and Research Activities	別紙参照		
担当科目 / Teaching Courses ※シラバスを添付ください。 Please attach the course syllabus.	1	科目名/Title of the Course Iron Curtain: Eastern Europe during the Cold War	開講場所・曜時限 Class Information (Lubbers 120, Tuesday and Thursday, 1:30 pm to 2:50 pm)
	2	科目名/Title of the Course Nation and Nationalism	開講場所・曜時限 Class Information (Lubbers 122, Monday, Wednesday, Friday 12:00 pm-12:50 pm)
	3	科目名/Title of the Course	開講場所・曜時限 Class Information ()
	4	科目名/Title of the Course	開講場所・曜時限 Class Information ()
その他の教育研究活動 / Other Educational and Research Activities	別紙参照		

別紙

教育研究活動の概略

秋学期の前半に歴史学科で"**Iron Curtain: Eastern Europe during the Cold War**"を、春学期の前半に政治学科で"**Nation and Nationalism**"の授業を担当した。前者は 200 番台の授業で、2-3 年次以降の歴史専攻の学生が中心、後者は 100 番台の基礎科目で、社会科学系の教養科目にも指定されており、1 年から 2 年次の様々な専攻の学生が受講していた。学科の同僚の支援を受けつつ、リーディングを課したうえで、議論形式で進める授業に取り組んだ。

1) 歴史学科での戦後東欧史の講義

歴史学科の授業については、学科長の **Dr. Jeanne Petit**、コンタクトパーソンになってくれた **Dr. Gloria Tseng**、日本史の専門家の **Dr. Wayne Tan** から助言を得た。200 番台のコースは一週間で 200 ページのリーディングが目安となっていると伺い、授業の予定に合わせて、8 週間分のリーディングの予定を組んだ。学生には毎回、要約と三点の論点、疑問点を書きだしたものを提出してもらった。概略が分かるようなテキスト的な文献とモノグラフとを組み合わせるようにしたが、実際に授業をしてみると、概論的文献ではほとんど意見が出ず、ある程度、論争的なテーマのモノグラフを課した時のほうが、学生の積極的参加を得ることができた。授業ごとの到達目標を明確にしたうえで、それを達成するために適切な文献を十分に選んでおくことが非常に重要であると実感した。

テキストについては、ホープカレッジの図書館が **Online** の図書や雑誌論文を幅広く提供しており、その中から指定することができたのが、大変便利であった。雑誌論文は明治学院大学でもかなりのアクセスが可能だが、学術書や概説書についてもアクセスがあることは、授業でリーディングを課す際には大きなアドヴァンテージであると考えた。アクセスは契約によるようで、本全体が **PDF** ファイルでダウンロード可能な場合もあれば、ダウンロードはページ数や利用期間の制限がかかっていたり、オンラインでのみ読めたりと様々であったが、それに合わせてアサインメントを考えれば問題はない。著作権を考慮しつつ、1 冊から 2 章までを上限に、自分で図書から **PDF** ファイルを作成して配布することも可能であった。

歴史学科の学生は、戦後東欧史そのものについての予備知識はなかったが、アメリカ史やホロコーストの授業などを通じて、第二次大戦についてはある程度の準備があった。また、かなりのリーディングをこなしていくことで、かなりスピーディーに戦後東欧史についての議論の土台となる知識を学び、授業ではかなり深い議論をすることができた。

この授業では、関連テーマについて、**Final Essay** を課していたが、**Dr. Petit** から、エッセイに向けて段階的に課題を設定すること、学生が関連文献にアクセスできるよう図書館司書の支援を受けること、ループリックを作ることの三点の助言を得た。

ホープカレッジの図書館には、二つの学科ごとに専門の司書が文献アドバイスをしています。歴史担当の司書に授業に来ていただき、授業の一回を東中欧戦後史文献の紹介と探し方の確認に充てた。ホープカレッジにこの分野の蔵書は少なかったが、前述の **Online** の文献と、**ILL** での取り寄せで、学生たちもかなりの文献にアクセスすることができた。

8週間の授業だったため、エッセイの準備時間は短かったとおもうが、最終的にはかなり面白いエッセイも提出された。エッセイの組み立て方については、3年次までには十分訓練ができている印象であった。構成、形式、内容についてルーブリックに基づいて採点し、それぞれにコメントを書いて返却した。エッセイの最終コメントについては、**Dr. Tseng** にも相談し、ふさわしい表現などを教えてもらった。週2回80分の授業であったが、毎回の授業準備、リーディングの要約と論点へのコメント、エッセイ指導、採点と、授業の負担はかなりのものであった。

2) 政治学科での **Nation and Nationalism** の講義

政治学科で担当した "**Nation and Nationalism**" については、政治学科学科長の **Dr. David Ryden** に同じ100番台の入門科目であるアメリカ政治入門の **e-learning** にアクセスさせてもらい、シラバスやリーディングのレベル、クイズやテストの仕方などをそこから学ばせてもらった。週3回50分ずつの講義で、始めるまでは様子が想像できなかったが、担当してみると50分ずつというのは、学生も教員も集中力が続き、また隔日で授業があるので、間に課題を課すことができるため、効率的であった。ただ、授業時間が短いので、相当ポイントを絞らなければならない、最後までそこが課題であった。

リーディングについては、教科書については、内容確認のマルチプルチョイスのクイズを作って何度か実施した。また、週の最終日はテーマと関連した新聞記事を課題にし、要約と論点を準備させ、ディスカッションを行った。4週目が終わった時点で、そこまでに学んだ概念を応用して実際のケースを分析する **take home exam** を実施した。この授業では、知識を身に着けつつ、分析や思考へといざなう授業を入門コースでどのように実施するかという点で、様々な形を試みることができた。一つ目の歴史学科の講義である程度経験を得ることができたので、少し余裕を持って臨むことができたが、学生の関心や前提知識がまちまちで、別の意味の難しさがある授業であった。

内容面では、このトピックをアメリカで教えることが思った以上に難しかった。全般に、ホープカレッジの学生たちはミシガンを始め中西部の小さな町の出身者が多いため、アメリカについても新しい理解の切り口を提供し、さらにアメリカの外の世界へ関心も向けさせることに努めた。ネイションという概念が、アメリカでは特殊な使われ方をしているので、他国の事例に基づくネイションとナショナリズムの説明をしつつ、アメリカン・ネイションについても統合的に説明することが必要で、自分の視野も広がったと思う。

3) 課題と教員負担

ホープカレッジの他の教員は、一学期に 3 コース教えているので、これまでの積み重ねがあるとはいえ、その負担は大きいと思う。周囲をみても、様々なエレメントを刻んで成績を付けていく方式のため、絶えずクイズ（小テスト）の採点をしており、16 週間のフルセメスターの授業でも 8 週間目には、中間テストをして中間成績を出さなくてはならない。また、授業を担当している学生のほか、アドバイザーをしている学生も含め、オフィスアワーにはエネルギーに学生にアドバイスをしている様子が見られた。

シラバスの執筆、予習、復習時間の設定、オフィスアワーの設定など、明治学院大学でも取り組んでいるが、学生にある程度ハードな課題を出し、それを教員がしっかりフォローしていくという根本部分の転換があつて初めて、このような取り組みが現実的に機能するのではないかと身をもって実感させられた。かなり時間のかかる課題のない講義はないので、学生も課題に取り組まざるを得ない。キャンパスのあちこちで夜までテキストを読み込む姿が見られた。教員側が授業負担をかなり重く感じていることはそこここに見て取れたが、それでも真剣に取り組む姿は印象的であった。

4) 学生サポート

授業に際し、さまざまな他部門、事務系スタッフとの密接な協力関係があることも興味深い点であった。

図書館専門司書の授業内協力については、前述の通りであるが、図書館には、ライティングセンターもあり、学生がエッセイの相談に行くことができる。学生がエッセイの相談に行くと、相談内容のサマリーが、学生本人とその課題の担当教員にメールで送られる仕組みとなっており、教員も学生のエッセイに向けての努力状況を知ることができる。ほとんどの教員が、学生がライティングセンターを利用してエッセイの改善に努めた場合、加点することになっている。私も明治学院大学でライティング支援カウンターの立ち上げに携わった経験から、その仕組みには大変興味をひかれた。ホープカレッジのライティングセンターは教員が専属で運営しており、相談員は訓練を受けた上級の学部学生である。本学の支援カウンターは大学院生を特別 TA として採用しており、相談員の学術レベルは高いが、専属の教員がいないために授業との連携などに課題があるのではないだろうか。

<https://hope.edu/offices/klooster-center/>

また、授業参加に配慮が必要な学生を支援する **DISABILITY AND ACCESSIBILITY RESOURCES**（通称 **DAR**）という部局があり、人前でプレゼンテーションをする、ノートを取る、試験時間などの面で配慮が必要な学生に対する支援が行われている。学生がそこに登録すると、その学生の受講している授業の担当教員に **DAR** から連絡がいき、配慮点を伝えてもらえるほか、相談も受け付けている。ノートテイカーも **DAR** で準備してくれるほか、**DAR** で静謐な空間で 1, 5 倍の時間で試験を受けるなどの措置も必要に応じてとられていた。個別に試験を受ける明学でも障がいのある学生への支援が行われているが、より広い意味での様々なハンディキャップに組織的に対応する仕組みがあることを興味深く思

った。

<https://hope.edu/offices/disability-services/>

様々な事情で出席が滞ったりする学生もいるが、履修登録センターがハブとなって、そのような学生を早期に発見し、アドヴァイザー教員との面談を通して問題解決を図る仕組みがとられていた。私がイニシャチブをとることはなかったが、他の授業担当教員から履修登録センターに出席状況についての連絡が行くと、センターからその学生の受講している他の科目の教員に出席状況、課題遂行状況についての問い合わせが来る仕組みで、私もそのような問い合わせを受けて、何度か回答を送った。また、前学期の成績や単位取得状況に問題があった学生についてのアドヴァイスもあるようで、それについての問い合わせも受けた。

このような、至れり尽くせりの学生サポートについては、教員の間でも **spoon-fed** であり、甘やかしすぎであるという批判もあるようだった。しかし、管見の限りでは、そのような介入を受けて、しづしづ日常生活を立て直し、授業に戻ってきて、無事軌道にのる学生もあった。また、**DAR** の支援を受けつつ授業に集中し、学業面でよい結果を出した学生もいた。そこから考えると、支援には意義があるのではないだろうか。

前述のような批判はあるものの、ホープカレッジは、リベラルアーツカレッジとしての存在意義はきめ細かな学生指導にあるという点で教職員の意識は一致している。大規模な州立大学ではなく、ホープカレッジを選ぶ学生、保証人もそこに期待しているという。どの大学でも伸びる学生もいるが、ホープカレッジだからこそ伸びられるという学生も確実にいると思われる。その層に的を絞った丁寧な教育の一端に触れることができた貴重な教育経験であった。

現地で行った学術活動について

秋学期の前半はほとんど他の学術活動を行う余裕はなかったが、秋学期の後半とクリスマス休暇は講義がなかったのでその間にいくつか自分の研究を進めることができた。一つは、東中欧諸国の「民主主義の後退」を巡る議論について、民主主義と立憲主義の関係に焦点をあてつつ分析する論文の執筆であり、現在学術誌で査読を受けている。

二つ目は、自分の研究対象である、チェコスロヴァキアの政治家ミラン・ホジャが、アメリカ亡命中に行った活動についての研究であり、これについては、ホープカレッジの歴史学科と政治学科の共催のコロキウムで報告"**An Alternative to People's Democracy?**

Milan Hodža's Vision for Post-War Central Europe A Conversation between Dr. Wayne Tan and Dr. Mizuho Nakada-Amiya"を行った。歴史学科の **Dr. Wayne Tan** は東欧史にも詳しく、コロキウムは、**Dr. Tan** との対話という形式で行われ、最初に **Dr. Tan** がチェコスロヴァキア史の概略を説明、次に私がミラン・ホジャのアメリカ亡命と戦後構想についての研究報告を行い、最後に **Dr. Tan** との質疑応答をした。学生と教職員が参加してくれて、よい経験となった。このテーマについては、冬休みを利用して、コロンビア大学の希少書

図書館で史料調査も実施し、今後論文にまとめていく予定である。

ホープカレッジは当然のことながら研究大学ではないため、大学院生もおらず、教員間の研究交流もあまり行われていない印象であったが、個々の教員は教育の合間をぬって、熱心に研究も行っているので、個別に話すことで刺激を受けることは多かった。